

地域づくり表彰

東彼杵ひとことものの公社（長崎県東彼杵町）

地域の「ひと」×「こと」×「もの」
掛け合わせて「自分ごと」の未来づくり

一般社団法人
東彼杵ひとことものの公社

代表理事

もり かずたか
森 一峻



1. 東彼杵町の概要

長崎県の中央部に位置する東彼杵町。丘陵地の棚田や段々畑が広がり、特産「そのぎ茶」や米、果樹などの栽培が盛んです。古くから街道が交わる交通の要衝であり、長崎、佐世保両市までJR大村線で約1時間、長崎空港まで車で約30分と交通利便性が高い立地です。



茶畑の美観が広がる東彼杵町

2. 活動開始の背景・経緯

東彼杵町東部に位置する千綿地区。近年は小売店を中心とする生業が徐々に減り、活気が失われています。

愛着ある故郷にかつての賑わいと街並みを取り戻したい。

この土地に息づく資源を自らの手で磨き、次代に繋ごうとする機運が地元の若手を中心に少しずつ高まっていました。

最大のきっかけは、一軒の古びた米倉庫のリノベーション。古里の再生に向けた拠点づくりとして、住民有志でまちづくりグループを結成し、解体寸前だった旧米倉庫の改修を町に提案しました。

そして平成27年12月、「Sorriso riso（ソリッソリッソ）」が完成。カフェやアンティークショップなどの店舗だけでなく、誰でも利用できる共有スペースを設置し、地域住民が気軽に集える「場」をつくりました。

イタリア語で「微笑みの米」と名付けたこの交流拠点を通して、町の認知度向上と交流人口の拡大を図っています。



かつての米倉庫「ソリッソリッソ」

その後平成29年、一連の活動を継承し、町民有志で「（一社）東彼杵ひとことものの公社」を設立しました。地域商材の開発や拠点開発のサポート運営および地域のリレーションをはかるイベントやプロモーションを手掛けています。

3. 活動内容

公社の活動の柱は、特産「そのぎ茶」をメインに、東彼杵町を感じられるこだわりの品々を取り扱うセレクトショップ経営とポータルサイト運営です。移住者も巻き込みながら、情報発信や担い手育成を積極的に展開しています。

コンセプトは「まちづくりは人づくり」。町内で事業を起こし、生業を営もうとする人のサポートを通じて、一人ひとりが熱を持って課題解決と自分らしい暮らしの追求に挑む空気を生み出しています。



こだわりが溢れる「くじらの髭」

セレクトショップ「くじらの髭」では、オリジナルパッケージで価値を付加した「そのぎ茶」に加え、町で生産されている菓子や農産加工品

などを取り扱っています。

ただ、町に元々ある良品が町外消費者に届きにくい現状もあります。そこで、ショップと同名のウェブサイト「くじらの髭」を構築してインターネット販売を展開するとともに、町が秘める魅力を多彩に発信しています。

また、「ひと」「こと」「もの」「みせ」等のジャンルに分け、それらに関わる町民らの思いをとことん深掘りしてウェブ記事で紹介。取材活動を通して各事業所との連携も深めながら、表面的ではない魅力の発信に努めています。ここは単なるショップではなく、商品を通して各生産者さんの背後にあるストーリーやコンセプト、何より熱を届ける場所なのです。



「ひと」を紹介するウェブサイト

かつての米倉庫周辺に次々と派生するユニークな店舗や、県内外でその魅力が再評価されている既存の観光スポット「千綿駅」など、これまで町に眠っていた「点」がにわかに結び付き、太い「線」が生まれ始めています。公社ではその線をさらに繋ぎ、魅力的な「面」への拡大を楽しみながら進めています。

4. 活動の広がり

「この町だったら、この地域だから、やれそうな気がしたんです」。東彼杵町で平成29年、子育て中のママ友と花屋「ミドリブ」を始めた飯塚陽子さんは関東からの移住者。たと

え慣れない土地でも、町内に次々誕生する店舗や、全体を包むポジティブな雰囲気に「背中を押された」と話します。私たちは平成25年から千綿地区でチャレンジ出店などを支援してきました。「地区内で1年に1軒以上の新規出店」という目標を大きく上回り、8年後には約25店舗が誕生しました。

ちなみに「ミドリブ」は令和4年から千綿駅舎内に店舗を構え、お客さんを笑顔で迎えています。



駅舎内に店舗を構える「ミドリブ」

5. 「今」を記録し、「未来」へ

公社では町民や各店主を取材し、記事にまとめて情報発信する取り組みを続けています。その理由は、「今」を「未来」へ残すため。一過性の情報にとどまらず、町に関わる人々の声を通して町の魅力や課題を顕在化し、アーカイブとして蓄積することを目指しています。

6. “他力、もウェルカム

令和2年には地場産業の活性化や交流人口拡大などを目的に、九州電力と組んで新事業に着手。その成果として、令和4年に千綿地区で新たな交流拠点「umino わ」を開業しました。他力をオープンに受け入れる姿勢も公社の特徴です。



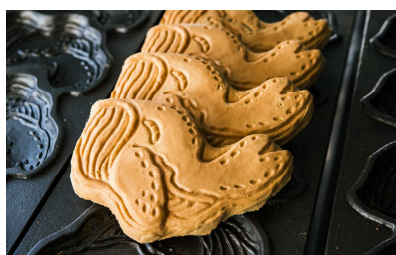
新たな交流拠点「umino わ」

7. 歴史をクリエイティブに再構築

東彼杵町がかつて鯨肉の流通拠点として栄えた歴史を今によみがえらせようと、公社では鯨をモチーフとしたたい焼き風和菓子「くじら焼」を九州電力と協働で開発しました。

大海を回遊する鯨をイメージして、移動販売車というユニークな販売形態を採り、町内外での広い認知と販売に成功しています。

併せて、ほうじ茶を練り込んだ皮とあんをセットにし、鯨をモチーフとするパッケージで包装した「くじら最中」も商品化。これらは地域ブランド「CHANOKO」として展開し、長崎県主催「長崎デザインアワード2021」で全82商品の中から金賞に輝きました。私たちが大切にしている「地域のルーツ」を丁寧に辿りつつ、クリエイティブに発信する取り組みが評価されたことは、大きな励みとなっています。



町の歴史を感じられる「くじら焼」

「ソリッソリッ」として再生した「旧千綿村農協米倉庫」は令和2年、長崎県まちづくり景観資産（建造物）に登録されました。取り壊し寸前だった遊休施設が、リノベーションを経て、町のランドマークとして再び輝きを取り戻しました。

また、無人駅のJR千綿駅も、そのレトロな外観やホームから望む大村湾の絶景など、その価値を再構築して広く発信することで、今では町の観光資源となっています。

8. 課題先進地。だから面白い

東彼杵町では、町内に仕事がないために人材が町外へ流出してしまう現状があります。公社では「まちづくりは人づくり」の理念の下、その課題解決に向け、町内での就労と生活を実現させようと、記事執筆を請け負うライター育成に着手しました。「町内に暮らし、書くほど収入が増える」というビジネスモデルの構築により、情報発信と収益化の好循環を生み出そうとしています。

併せて、県内大学との連携体制も構築。「課題先進地」を逆手に取り、フィールドワークの場として学生のキャリア教育に貢献しています。ラ

イターやクリエイターの育成に加え、前述の新たな交流拠点「umino わ」には縫製店を設け、地域住民らを雇用。店内にコインランドリーを併設したのは、町民の生活と観光を交差させるための工夫です。

公社のメンバーは約20人。その周辺にはSNSなどで緩やかにつながる町内外のネットワークがあります。多彩なメンバーの発想力と行動力は町のピンチ時にも躍動。新型コロナ禍で来客が減った飲食店のため、宅配サービスのシステムを構築し、1か月で1730食を町民に届けました。

9. 仲間とともに地域再生

ソリッソリッの来客数は令和元年が約15,300人で町観光客実数の約21%でしたが、そのぎ茶のセレクトショップ開店に伴い施設をリニューアルした令和2年は約15,500人、令和3年も約16,900人と増加しました。コロナ禍で町全体の訪問客数が約70%減少する中、地域のにぎわいを下支え。公社の取り組みはマスコミにも多く取り上げられ、町の認知度向上に寄与しています。令和3年には、全国の地方新聞等が表彰する「地域再生大賞」で「地域の未来賞兼九州・沖縄ブロック賞」を受賞することができました。



受賞を喜ぶ公社の仲間たち

私は自身を「地域のパシリテーター」と名乗っています。この町には面白いことを考えている人が実は多いのです。私はその使い走りとして、表現できる場を創っているだけです。人々が程良くつながりながら、日々育まれている千綿地区の「場」。そこから「ミドリブ」メンバー飯塚さんのように、挑戦を諦めない、やりたいことを思い切りやれる、そんな人が次々と生まれています。今後も「まちづくりは人づくり」を体現しながら、唯一無二の地域づくりを推進していきます。